

## 小学校における「牽引練習法」による 「浮く・泳ぐ運動」の体育授業

鈴木 一成\* 森 勇示\*\*

\*名古屋市立柳小学校

\*\*保健体育講座

### Swimming Classes for Acquiring “Floating and Swimming Skill” in Primary School : Use Training Methods of Swimming by Holding a Towing Rope

Kazunari SUZUKI\* and Yuji MORI\*\*

\*Yanagi Elementary School

\*\*Department of Health and Physical Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

#### 要 約

小学校学習指導要領の体育・水泳の領域は、低学年「水遊び」、中学年「浮く・泳ぐ運動」、高学年「水泳」となっている。しかし、現状では多くの学校において「浮く・泳ぐ運動」の趣旨を踏まえた指導計画がつくられておらず、中学年から近代泳法のフォームの単調なドリルや、泳ぐ距離の段階的増加を学習課題に設定するような水泳指導が行われている。本稿では中学年の「浮く・泳ぐ運動」の授業をどのようにつくるのかを主題にして、「牽引練習法」による「浮く・泳ぐ運動」の授業実践を検討し、「浮く・泳ぐ運動」のための教材事例を提案する。

**Keywords** : 初歩的な泳ぎ, け伸び, 牽引, バランス課題, 浮く・泳ぐ運動

#### 1. 問題の所在

2008年に小学校の学習指導要領が改訂され、小学校体育の水泳領域において、小学校第3学年及び第4学年(中学年)の指導内容は、次のように明記されている。

「浮く運動では、いろいろな浮き方やけ伸びをすること」「泳ぐ運動では、補助具を使つてのキックやストローク、呼吸をしながらの初歩的な泳ぎをすること」「呼吸しながらの初歩的な泳ぎとは、呼吸しながらのバタ足泳ぎやかえる足泳ぎなど、クロールや平泳ぎなどの近代泳法以外の泳ぎのことである。このような泳ぎは、高学年で行う水泳の前段階となるものである。」<sup>1)</sup>(下線部筆者)

この学習指導要領の改訂において、小学校水泳領域の学習内容のなかに初めて、「初歩的な泳ぎ」という言葉が導入された。「初歩的な泳ぎ」では、高学年で取り上げられる近代泳法の学習の準備として「楽しみながら水の中で運動する」ことを改めて見直し、低学年か

ら中学年までの4ヵ年を有効に活用した指導の工夫が求められることになった。「初歩的な泳ぎ」の導入は、小学校体育の水泳に関する改訂ポイントを象徴していると言えよう<sup>2)</sup>。

しかし一方で、学習指導要領の改訂から5年が経過としている現在、学校現場における水泳授業は、どのように変化しているのだろうか。体育授業において、水泳授業に当てられる時間数は限られているという現実がある。この制約のなかで、教師は、子どもを何とか泳げるようにしようとして、学習順序の早い段階からクロールや平泳ぎなどの「近代泳法」の技術学習に取りかかりがちである<sup>3)</sup>。そして、中学年の水泳指導は、近代泳法のフォームを構成する動作が易しい運動形式に変形されないで完成形に近い運動形式で運動課題にされることが依然と続いている。このことは、指導教員として学校現場に身を置いて感じているところである。また、学校現場では「初歩的な泳ぎ」という概念があまり理解されていないケースもあり、この

概念の十分な理解の上に、初心者指導に挑戦することが大切であるという指摘もある<sup>4)</sup>。

それでは、低学年の「水遊び」から高学年以降の「水泳」へと接続する中学年において設定されている「初歩的な泳ぎ」を授業としてどのように取り上げたらよいのだろうか。言い換えれば、「水遊び」と「水泳」をつなぐ「浮く・泳ぐ運動」の授業づくりをどのように進めたらよいのだろうか。これが本稿の主題である。

## 2. 研究の目的

小学校期における水泳系の指導実践に関する研究には、水泳研究の動向を考察する研究<sup>5)</sup>、安全な水泳指導に関する実践報告<sup>6)</sup>、水泳を行うことの個人における意味に関する事例研究<sup>7)</sup>、学習者の主観的な運動感覚である「動く感じ」を主軸にした授業づくりの実践提案<sup>8)</sup>がある。また、小学1年生における「水慣れと潜り」の段階的指導を提案した報告<sup>9)</sup>、小学4年生でクロール75m全員完泳を目指す実践報告<sup>10)</sup>がある。しかし、これらの研究報告はいずれも、「初歩的な泳ぎ」の考え方に基づいた指導法には言及していない。

「初歩的な泳ぎ」に関しては、「け伸び」の指導研究が挙げられよう<sup>11) 12) 13)</sup>。それらの研究において、「け伸び」は、①近代の泳法において最も重要な基本的動作である、②指導体系のなかにひとつの目標運動形態として位置づけられるべき運動課題である、③小学校第3学年でほぼ達成できる運動課題である、ということが指摘されている。そして、正しい「け伸び」姿勢の観点として、「(水中で) あごを引いて両腕で両耳をはさみ」「体が一直線に伸びているか」などの項目が挙げられている。しかし、どのようにして「け伸び」姿勢を子どもにできさせるのか、正しい「け伸び」姿勢のキネステーズ感覚をどのようにして体感させるのかといった具体的な指導法までは提示されていない。

この点を補う指導として本間の研究<sup>14)</sup>が挙げられよう。本間は、キネステーズ感覚の視点から学習者が水のなかで対峙する課題を理解して、中学年の「浮く運動」から「泳ぐ運動」への系統的な指導の具体例を示している。例えば、浮くことは沈むことのなかでわかるようになることや、リラックスして浮いたり進んだりできることを泳ぎにおける呼吸動作に先行して学習させるのが効果的であるという。しかし、この論考のテーマは、低中学年で経験すべき「動き」であったので、指導の過程における具体的な動きの変化については詳細には示されていない。

「初歩的な泳ぎ」に最もよく当てはまる指導法は、「ドル平」という泳法であろう<sup>註)</sup>。「ドル平」は、初心者にとっては脚動作と腕動作との協調動作が比較的容易であり、このことを利用して推進力を得ながら、呼吸のために水面に顔を上げる動作を身に付けることを指

導順序の優先課題にしている。しかし、ある程度の推進力をつくれないうちや、伏せた浮き身姿勢をとる局面で体を強く硬直させてしまっている段階の者にとっては、ドルフィンキック動作と手のかき動作の強調は、依然として難しい課題のままであり、水面に顔を出す動作は上手くいかない。

浮力環境下で行われる水泳運動においては、浮き身の姿勢で顔を水面から出す動作を達成するためには、陸上において体重移動するのとは異なった形式である「水のなか」において、重心バランスを変化させることが必要になる。この重心バランスの感覚やバランスを変化させる感覚をわかるようにさせるには、まず、上下前後の方向感覚<sup>15)</sup>が基底となっている「水平に浮く感じ」を学習者が感知できなければ学習はうまくいかない。陸上とは異なって「水のなか」は浮力があるため、初心者にとっては方向や姿勢を感知しにくいようである。この動作感覚を体感させる指導法として「牽引練習法」が提案されている<sup>16)</sup>。しかし、その報告では、実践における具体的な指導課題や指導による動作の変化については言及されていない。そこで本稿では、小学校4年生対象の「浮く・泳ぐ運動」を「牽引練習法」で構成された授業実践で行い、「牽引練習法」において設定した各種運動課題で期待される効果と指導による動きの変化を検討し、教材事例を提案する。

## 3. 実践授業

### 3-1 授業の概要

授業の概要は表1の通りである。本授業は「牽引」による「浮く・泳ぐ運動」を中心に単元を構成している。単元は9時間扱い。単元前半はプールを横向きに使用し、牽引距離を15mとし、牽引の行い方の徹底と試行回数の確保を意図した。4人1組のグループで牽引される子は1人(図1)、牽引する子3人として、ローテーションして試行回数を確保した。単元後半はプールを縦向きに使用し、牽引距離を25mとして1回の牽引時間を確保し、バランス補正の感覚を強化させることを意図した。なお、牽引ロープは編み込んであるビニル製、太さ1cmで15m用牽引ロープと25m用牽引ロープの2種類を使用した。

### 3-2 「牽引」による「浮く・泳ぐ運動」プログラム

「牽引」による「浮く・泳ぐ運動」プログラムの内容は表2の通りである。

このプログラムは、一斉指導で行い、単元前半では

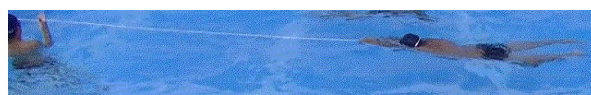


図1 牽引の様子

表1 授業の概要

単元名	「浮く・泳ぐ運動」 9時間扱い 平成25年6月～7月実施	
授業者	筆者(教職15年)と現職教師2名(教職29年・教職1年)	
学習者	Y小学校4年生(男子31名, 女子25名, 計56名)	
単元計画		
	1	2 ~ 9
学習過程	オリエンテーション W-upドリルの紹介 牽引の行い方	← W-upドリル(水かけ・顔つけ・つかまり浮き・流れるプール[歩く・浮く・進む・回るなど]) → バランス課題1(プール横向き1:15m牽引)      バランス課題2(プール縦向き2:25m牽引) ← 学習カードの記述(一言感想) →

表2 「牽引」による「浮く・泳ぐ運動」プログラム

No.	内容	方法
1	いろいろな体勢変化 (変形け伸び)	非対称 ①右(左)手は伸ばし左(右)手は体側につける
2		②片膝を曲げ, 片膝を伸ばす
3		対称 ③両肘を曲げる
4		④両膝・両足首を曲げる
5		⑤両手を下げる(首・胸・へその位置で両手でもつ)
6		⑥両膝を伸ばして脚を開く(Vの字)
7		⑦両手両膝を伸ばして両手脚を開く(Xの字)
8		⑧両手を伸ばし・両脚も伸ばす(け伸び)
9		伸縮 ⑨体勢変化を繰り返す(例:だるま浮き→け伸び)
10	いろいろな背浮き	非対称 ⑩右(左)手は伸ばし左(右)手は体側につける
11		対称 ⑪両手両足を伸ばす(背浮き)
12		横転 ⑫ローリングする
13	いろいろな顔の上げ方・ 落とし方(呼吸)	正面 ⑬正面に顔を上げ, 正面に顔を落とす(元に戻す)
14		斜め ⑭斜めに顔を上げ, 斜めに顔を落とす(元に戻す)
15		左右 ⑮右(左)に顔を上げ, 左(右)顔落とし(元に戻す)
16		一かき ⑯一かき入れて呼吸(正面・斜め・左右)
17		コンビ ⑰変形け伸びと顔上げ・落とし(呼吸)のコンビネーション

15m(プールを横を使う), 単元後半では25m(プールを縦に使う)で行う。表のNo.1~8はいろいろな体勢変化へアンバランスを生じさせ, この補正を意図した。No.1~7の補正経験がNo.8の「け伸び」姿勢を実感させるという考えによる。No.10~12はいろいろな「背浮き」である。ただ, No.12は「背浮き」と「け伸び」の連続する動きからローリングによる補正を実感させる意図がある。No.13~17はいろいろな顔上げ・落とし方であり, これらは呼吸時の首の感覚づくりである。これらプログラム番号は教材配列などの順番を意味していない。いずれも, アンバランスをつくり, 補正する能力を高めようとするのがねらいである。

図2は左(右)手は伸ばし, 右(左)手は体側につけた姿勢を保持しようとするものである。右手を伸ばしたら次は左手, というように左右両方を体感させた。子どもは体の左右への傾きを補正しようとしていた。



図2 片手伸ばし・片手体側

この動きの延長にはクロールの息つき時のバランス保持がある。

図3は右膝を伸ばし左膝を曲げることで生じるアンバランスを補正しようとするものである。片膝・片膝伸ばしのバリエーションは図3の他, 曲げた足裏を伸ばした膝に付ける姿勢, 膝角度を小さくする姿勢で試行する児童もいた。

図4は両肘を曲げることにより生じるアンバランスを補正しようとするものである。両肘を伸ばした角度を0度とし, 肘の最大屈曲180度とした。牽引の間, そ



図3 片膝曲げ・片膝伸ばし



図4 両肘を曲げる



図5 両膝・両足首を曲げる



図6 両手を下げる（へその位置で両手でもつ）

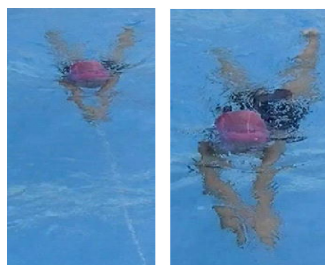


図7 両膝を伸ばし脚を開く（Vの字）

の角度を自由に変化させたりする。

図5は両膝と両足首を曲げることにより生じるアンバランスを補正しようとするものである。初めは両膝を曲げることを行い、次に足首も合わせて行った。膝の曲げ方は図5のように横に開くような曲げ方（横曲げ）と、胸に引きつけるような曲げ方（縦曲げ）がある。共に腿に水の抵抗を受けるが、後者は腰も落ちやすくバランスを保てなくなる児童が多かった。

図6は、へその位置で牽引ロープを両手でもつことで生じるアンバランスを補正しようとするものである。両腕を上げた時は重心の位置が胸にあるが、両手をへその部分でもつことで重心の位置がへその方に移る。両腕膝が曲がり大腿部が沈む。アンバランスを補正するために、下腿部を上げ、上体はそっている。頭が上がり、頭額部で水の抵抗を受けている。

図7は膝を伸ばし開くこと（Vの字）で生じる体の傾きや左右の蛇行からのアンバランスを補正しようとするものである。1回目はVの字のままで牽引させた後、2回目以降は途中で脚の開閉をゆっくり試行させた。「脚を開くと止まり、閉じると進む」という感想が多く聞かれた。

図8は両手両膝を伸ばして両手足を開くこと（Xの字）で生じるアンバランスを補正しようとするものである。手足の開き具合に多様な程度の差異が考えられる。今回は左右対称だが、左右非対称も様々考えられる。



図8 両手両膝を伸ばして両手足を開く（Xの字）

図9は両手両足を伸ばす、いわゆる「け伸び」姿勢である。毎時間の最初と最後に試行させた。本実践ではフォームの指導は一切せずに、水の抵抗を受けやすい姿勢と受けにくい姿勢の体感と、アンバランスを補正する感覚づくりという二つアプローチにより「け伸び」姿勢が上達されていった。「一番スイスイ進むのがけ伸びです」という感想が多く聞かれた。

図10はだるま浮きから「け伸び」へと体勢変化（伸縮）で生じるアンバランスを補正しようとするものである。体勢変化にも「ゆっくり」と「速く」という2種類の条件を付けた。「速く」の方がバランスを崩しやすかった。

図11は「背浮き」で右手は伸ばし左手は体側につけることで生じるアンバランスを補正しようとするものである。図1（No.1）と同様に、右手を伸ばしたら次は左手というように両方を体感させるようにした。子どもは体の左右への傾きを補正しようとしていた。この



図9 両手両脚を伸ばす（け伸び）

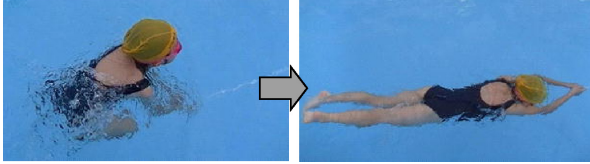


図10 だるま浮きから「け伸び」へ



図11 いろいろな「背浮き」（非対称）



図12 いろいろな「背浮き」（対称）



図13 顔の上げ方・落とし方（正面）



図14 顔の上げ方・落とし方（左右）

動きの延長には背泳ぎの腕のスクロール時のバランス保持がある。

図12は「背浮き」で左右対称でのアンバランスを補正しようとするものである。あごを引きすぎると、頭が起き腰が折れて沈んでしまうことでアンバランスを助長させてしまう。図12右は力みがみられる。左のように脱力しながらも、頭を水面に落とし、腰が折れないように体幹をしめていくような感覚を重視した指導を行った。その結果、「背浮き」姿勢を保ち、キックを緩く入れてみるができるようになった子が出てきた。また、「け伸び」から「背浮き」の連続（ローリング）や水中で「背浮き」姿勢を保持する（バサロ）を試行する児童もいた。

図13は正面による顔の上げ方・落とし方である（No.13）。初めて顔を上げた時は体全体が立っていた（上段）。しかし、牽引される回数が増えていくと上体が横になり（中段）、脱力とともに浮き身姿勢になった（下段）。慣れてきたら顔を落とすように指示した。

図14はNo.1の変形「け伸び」から、左に顔を上げて息つきをすることで生じるアンバランスを補正しようとするものである（No.15）。左右の顔上げでは、顔を上げるというよりも、体全体をローリングさせて顔だけを出すように指導した。No.1の変形「け伸び」の姿勢が息つきを入れることで崩れることが多かった。この動きの延長にはクロールでの息つきでのバランス保

持がある。

図15と図16は一かき入れて呼吸することで生じるアンバランスを補正しようとするものである（No.16）。図15の動きの延長には平泳ぎでの息つきでのバランス

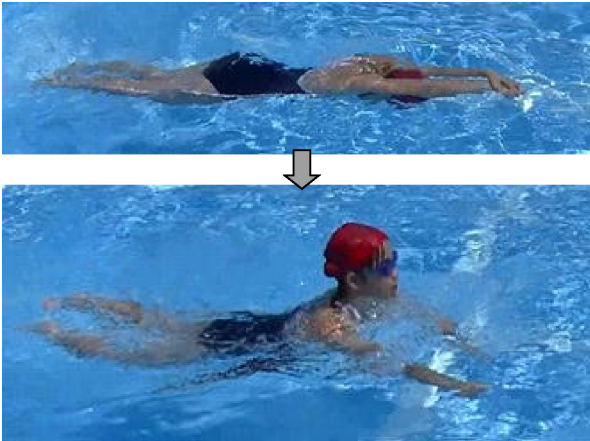


図15 一かき入れて呼吸 (正面)

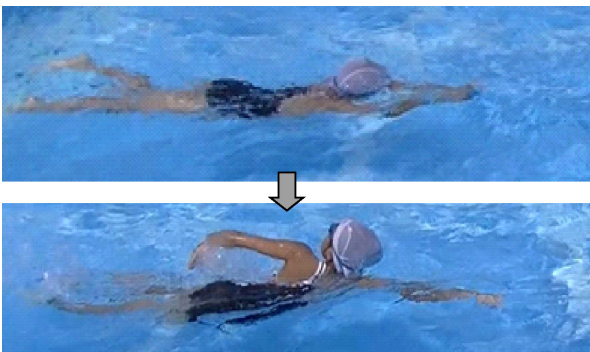


図16 一かき入れて呼吸 (左右)

保持がある。また、図16の動きの延長にはクロールでの息つきでのバランス保持がある。

### 3-3 特徴のある児童の動き

図17は、「け伸び」の姿勢から正面での息つきをして、再び「け伸び」姿勢へ連続する動きである。「け伸び」の姿勢から顔を上げ始め、両手を手前に引きながら、両膝を曲げて上体を伸び上げることで正面の息つきを行っている。ここまではバランスを保持しているが、息つき後で大きく沈んでしまいバランスを崩している。その原因は両腕が伸びきれず曲がったままであり、重心の位置が下がり、さらに下肢部分も沈んでしまったからだと考える。沈むことで生じるアンバランスを補正する感覚を習熟させる必要がある。そのため、図10で示した「だるま浮きからけ伸びへ」という伸縮を伴う体勢変化を行うことで改善を期待した。

図18は、「け伸び」の姿勢から正面での息つきをして、再び「け伸び」姿勢へと連続する動きを2回行い、体勢変化を繰り返している動きである。「け伸び」ではバランスを崩すことなく姿勢を保持することができている。特に、息つき後、顔を正面に落とす時のアンバランスを補正している。また、正面での顔上げでの呼吸では、上体の起き上がりを両手かきのタイミングで行い、両膝を適度に曲げてバランスを保持している。

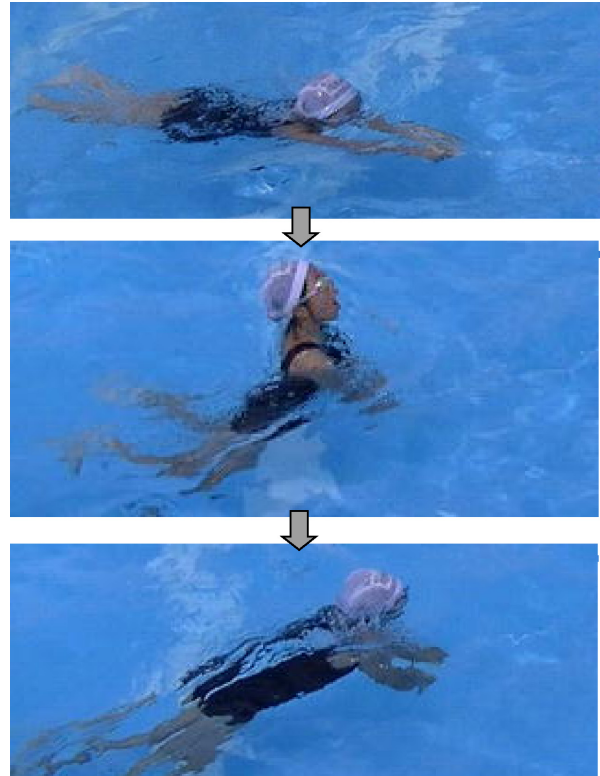


図17 正面での息つき (1回)

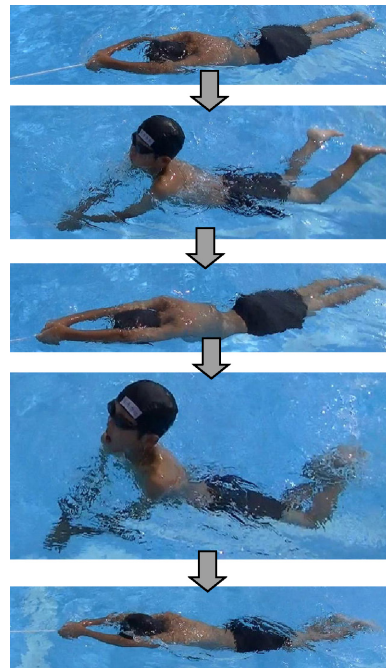


図18 正面の息つき (2回連続)

正面の息つきは斜めや横向きに比べ取り組みやすく、一斉指導で試行回数を増やすことができた。

教師はこのような動きを見つけると、すぐに平泳ぎのフォームに近づけたいと考える。だが、バランス能力の向上をねらい、この動きの多様化と洗練化を図るには、図8で示した「け伸び」と図13で示した「正面による顔の上げ方・落とし方」を重点的に行う必要が

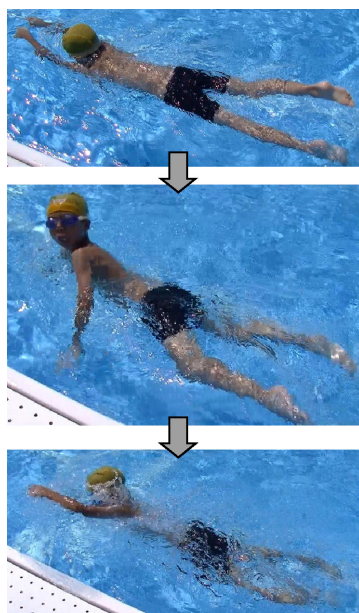


図19 横向きの息つき後のバランス保持

ある。さらに、図5で示した「両膝と両足首を曲げる」ことにより、どの曲げ方が一番水の抵抗を受けるのか(受けないのか)を体感することで、息つき時のアンバランスが補正できると考える。さらに、「け伸び」と正面での呼吸のコンビネーションでは、「け伸び」と「正面での呼吸」の時間はどちらが長いとバランスをとれるかを子ども自身に体感させていくことで適切な動きをつかんでいくものとする。

図19は、脚を開いた「け伸び」の姿勢から正面での息つきをして、再び「け伸び」姿勢へと体勢変化を試行しようとした動きである。横向きの顔上げの際、一かきした左腕同様、右腕も下がってしまい、上体が起き上がっている。そのため、バランスを崩し、再び「け伸び」姿勢に戻れないでいる。このような動きは、本実践ではよく見られた。片手は伸ばし、片手は体側になった時のアンバランスを補正することが必要である。そのため、図2で示した「片手伸ばし片手体側」と図14で示した「顔の上げ方・落とし方(左右)」で、顔を横に上げて息つきをすることで生じるアンバランスを補正する感覚をつかむ必要がある。その際、体全体をローリングさせることで、顔が上がるようになることが期待される。

## 4 「浮く・泳ぐ運動」における体育授業の提案

### 4-1 推進課題よりもバランス課題を重視する

「浮く・泳ぐ運動」は「水泳」に先立って位置づいている。従来の多くの授業では、近代泳法の技術指導が中心に行われていた。具体的には、小学校現場においてクロールと平泳ぎを習得させるということである。学習指導要領解説の中学年にある「初歩的な泳ぎ」は

近代泳法以外だと示されているとはいえ、クロールや平泳ぎの泳法以外の動きを見出せなかったといえる。それは水泳の指導が推進課題に偏っていたためだと思われる。推進するだけでは力みが生じ、そこからバランスを崩して長続きしない子が「苦手な子」と見られてきた。

本稿では、バランス補正を実感させながら学習した。バランスがいいと抵抗が少なく、泳ぎは長続きする。そこで考えた指導は、「バランスを崩す」というものである。バランスを補正するにはバランスを崩す必要がある、これを指導内容として計画したのである。

推進課題が中心の授業では、子どもたちは泳いだ距離や時間で評価され、そこに優劣が生じる。ところが、バランス補正を実感する学習では、子どもたちは様々な姿勢変化を工夫するだけである。小学校では、しばしば集団を泳力別に分けて授業を進める。子どもの劣等意識を助長しないためにも推進課題よりバランス課題重視を提案したい。

### 4-2 牽引により楽に進む

よく、指導場面では「(水中で) あごを引いて両腕で両耳はさむ」「体が一直線に伸びていること」という技能ポイントが示される。こうした、止まって観察されるフォームとして動きをとる見方が教師には多い。実際の動きは流動的であり、止まっているかに見えても、バランスを常にとり続けており、また、水の抵抗も常に感じている。言い換えれば、アンバランスを常に補正し続け、抵抗を大きく受けないようにしている。こうした、運動経過の中で受ける様々な体感の条件はフォームの指導では見落とされてしまう。

「浮く・泳ぐ運動」領域における「初歩的な泳ぎ」は近代泳法の泳ぎを身につけることではない。そのため、「泳ぎ」のあらゆる感覚を経験させ、そこから子ども自身にとって最も楽に泳げる条件を見つけさせるべきだと考える。

牽引は自分の力で推進しているのではない。スキーと同様、姿勢コントロールしながら進んでいく。その過程の中で学ぶ様々な技術的内容があると考えられる。また、学年が上がって行くにつれ、見学者が増えるという現状がある。推察すれば、学年が上がるほど水泳が嫌いな子が増えるのではないだろうか。したがって、従来の水泳の在り方を見直す必要もある。あまり苦しくない水泳として牽引はその可能性が期待される。

### 注

「ドル平」に関する主要な著書、論文には以下のものがある。

①高山博(1963)「体育教育内容の現代化—水泳の初心者指導

- と関連して」体育の科学第13巻第6号
- ②学校体育研究同志会（1965）「水泳の初心者指導」ベースボール・マガジン社
- ③永井博（1977）「働くものの水泳教室」日本青年出版社
- ④学校体育研究同志会（1972）「水泳の指導」ベースボールマガジン社
- ⑤岡田和雄（1976）「水泳」小学校体育—高学年—、あゆみ出版
- ⑥永井博（1977）「ほく 泳げるよ」草土文化
- ⑦川口智久（1978）「誰でも3時間で泳げるよ」ごま書房
- ⑧新日本体育連盟全国水泳協議会編（1980）「水泳の指導の技術と理論」スポーツのひろば別冊
- ⑨新日本体育連盟監修（1981）スタートスイミング、青木書店
- ⑩中村敏雄・高山博（1963）「水泳における技術指導の実験的研究（第1報）—特に初心者指導における技術指導の内容と順序について—」東京教育大学附属高等学校研究紀要Ⅵ
- ⑪中村敏雄・鈴木善雄（1963）「水泳における技術指導の実験的研究（第2報）—特に初心者指導における系統性とその科学的根拠—」東京教育大学附属高等学校研究紀要Ⅵ
- ⑫高山博・中島紀子（1964）「実験研究を通してみた技術指導への内容と順序における問題点」（第2報の2）東京教育大学附属高等学校研究紀要Ⅶ
- ⑬中村敏雄・鈴木善雄・高山博（1964）「水泳の初心者指導における系統性（第3報）」東京教育大学附属高等学校研究紀要Ⅶ
- ⑭荒木豊（1976）「ドル平泳法から近代泳法への発展」学校体育研究同志会機関誌 運動文化No.6
- ⑮川口智久（1976）「若い世代の教師への手紙—ドル平泳法の生まれるまで—」学校体育研究同志会機関誌 運動文化No.6
- ⑯荒木豊（1983）「ドル平泳法とは何か—その基礎理論—」学校体育同志会編 たのしい体育・スポーツ第6巻
- ⑰井芹武二郎（1985）「水泳指導ノート」教授学の探求第3号、北海道教育大学、pp 33-40
- ⑱岡出美則（1991）「体育の教材構成過程における二つのレベルでの情報の組みかえ」愛知教育大学教科教育センター研究報告第15号、pp 79-90
- ⑲大後戸一樹・久保研二（2013）「授業を通して児童が読み取った運動情報の内容分析」学校教育実践学研究第19巻、pp 179-185
- 保健体育講座研究紀要No.35、pp 87-89
- 8) 成家篤史・鈴木直樹・寺坂民明（2013）「『感覚的アプローチ』による水泳学習の実践提案—動く感じに着目して—」体育科教育学研究第29巻第2号
- 9) 河野 隆（2010）「運動に親しみ進んで挑戦する体育学習」平成22年度名古屋市体育研究研究紀要 名体研のあゆみ第42号、pp 114-117
- 10) 佐々敬政（2011）「4年生でクロール75m全員完泳をめざす」体育科教育第59巻第7号、pp 34-37、大修館書店
- 11) 高橋伍郎（1983）「水泳における身体運動」, Japanese Journal of Sports Sciences 2 (7), pp 2-7
- 12) 三輪千子、本間三和子（2010）「小学校低学年に身につけておくべき水中での基本動作の達成度と陸上での運動遊びとの関係」, 体育科教育学研究26 (1) pp 1-13
- 13) 三輪千子（2011）「低中学年の授業で保証すべき基礎基本」体育科教育第59巻第7号、pp 30-33、大修館書店
- 14) 本間三和子（2011）「小学校低学年で経験すべき『動き』を問い直す」体育科教育第59巻第7号、pp 14-173、大修館書店
- 15) 金子明友（2007）身体知の構造、pp 172-184、明和出版
- 16) 鈴木一成（2011）「浮く・泳ぐ運動の授業実践—Y小学校4年生の実践から—」愛知教育大学教育創造開発機構紀要1、pp 177-182

(2013年8月27日受理)

## 引用・参考文献

- 1) 文部科学省（2008）「小学校学習指導要領解説 体育編」, p 49、東洋館出版社
- 2) 椿本昇三（2011）「新学習指導要領で水泳系は、何が、どう変わったのか」体育科教育第59巻第7号、p 10、大修館書店
- 3) 三輪千子・本間三和子（2010）「小学校低学年に身につけておくべき水中での基本動作の達成度と陸上での運動遊びとの関係」, 体育科教育学研究26 (1), pp 1-13
- 4) 前掲書2) p 11
- 5) 浜田元輔・小椋一也・藪崎聡（1992）「日本体育学会における水泳研究の動向に関する一考察」日本体育大学紀要第21巻2号 pp 163-180
- 6) 松井敦典（2011）「命を守る『安全水泳』の視点から問い直す」体育科教育第59巻第7号 pp 18-21、大修館書店
- 7) 鈴木誠直（2010）「体育授業の主観的意味概念に関する事例的研究—小学校6年生の体育授業を通して—」愛知教育大学